樋口
R-18
adult only

樋口さん

樋口さんは
僕のサークルの
後輩だった

綺麗なひと
だった

いつも
悲しそうに
笑うひとだった

いつか
樋口さんが暗い表情で
窓の外を眺めていた
ことがあった

車窓からは
海がよく見えた

樋口さんは
普段笑うときと
同じ目をしていた

樋口さんは
二年前まで
アイドルだった

僕は樋口さんが
笑うときは

それ以上他人に
踏み込まれたくない
時なのかと思った

そういう時の
樋口さんの
目元を僕は
なぜかエロいと
思った

事務所がゴタついて、そのときにユニットが解散して、そのまま樋口さんもアイドルを引退したらしい。

ただ僕は昔の話を詮索しなかった。多分樋口さんが僕の彼女になったのはそれだけの理由だ。

ある閉じられた人間関係の中で考え無しの人間同士がつがいになる。学生にはありふれた話だ。

…コーンスープで

なぜか今までに見た樋口さんの中で一番悲しそうな目をしていた気がした。それでも僕には樋口さんの過去を探る気力は無かった。

アァン！ジュテーム…！

オォン！ジュテーム…！

…なんでフランス映画ってこうも濡れ場が多いんだろう

わかってて借りたのでしょう？

えぇ

とぼけないで

どうせ先輩のことだから映画でも見ようって部屋に連れ込んで

濡れ場でも流していい雰囲気になろうって魂胆でしょう？

小賢しい童貞みたいですね

違う違うこんなエロいって本当に知らなくて！

はぁ？

じゃあ知らないでこんなエロ映画借りたって言うんですか？

そうそう！

はぁ…

あきれた

やめやめ！

ゴメン！チャンネル変える

続いてのニュースです

樋口さんも今日のことは忘れて！ね！

ぷフフ

先輩あきれるほど誠実なんですね

軽蔑します

へ？

意気地なし

不用意に女が男の部屋でふたりきりになるとでも？

無理して誠実ぶらなくてもいいですよ

男は全員頭の中がPの形をした怪物だということくらい知ってますから

頭の中のペニスに従って上手く女を手にするか

頭の中のペニスを見なかったことにして理性的であるかのように振る舞うかそのどちらにも失敗するか

まあいずれにせよただの技術の問題でしょう？

心の底から誠実な男は存在しない

つまりこちらが一線を踏み越えられる覚悟をしてきてるのだから

あなたも一線を踏み越える勇気くらい持てということ

…

樋口さん

厚生労働省の統計調査によると

今年度下半期の自殺者数は——

キスしていい？
…一々聞かないで

——また
社会情勢の先行きが
不透明であることから
今後の……

はあっ

はあっ

ねえ
お風呂

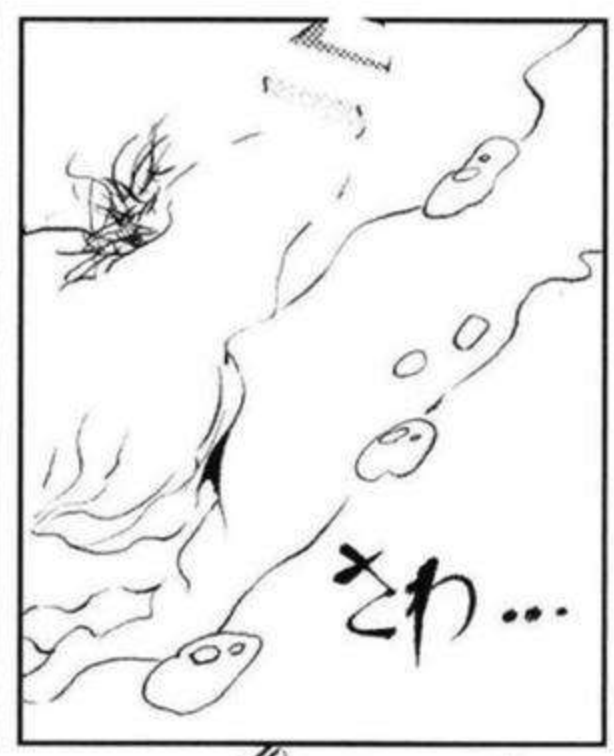
入りません？

…っ

ジロジロ見ないで気持ち悪い

ぴちゃ…

樋口さん…っ！


さわ…

樋口さんは献身的に
フェラチオをしてくれた。
現代では
驚くべきことだった。

レロレロォ

ぐぽっ

僕には
樋口さんは利発そうに
見えた。

だから、樋口さんが僕の
ペニスをしゃぶることを
楽しんでいるように見えたのは
ほとんど奇跡的に思えた。

レロオ

最悪

あ
はっ
くちゅっ
くちゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎ

あっ

あぁ♥

パ

パ

ズン

ズン

あ

あっ

っ…

やっ

あぁ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

はぁっ

馬鹿みたい

はぁっ

はぁ

樋口さんは
気まぐれに
僕のアパートに
来るようになった

ただいま

お

来てたんだ

ん

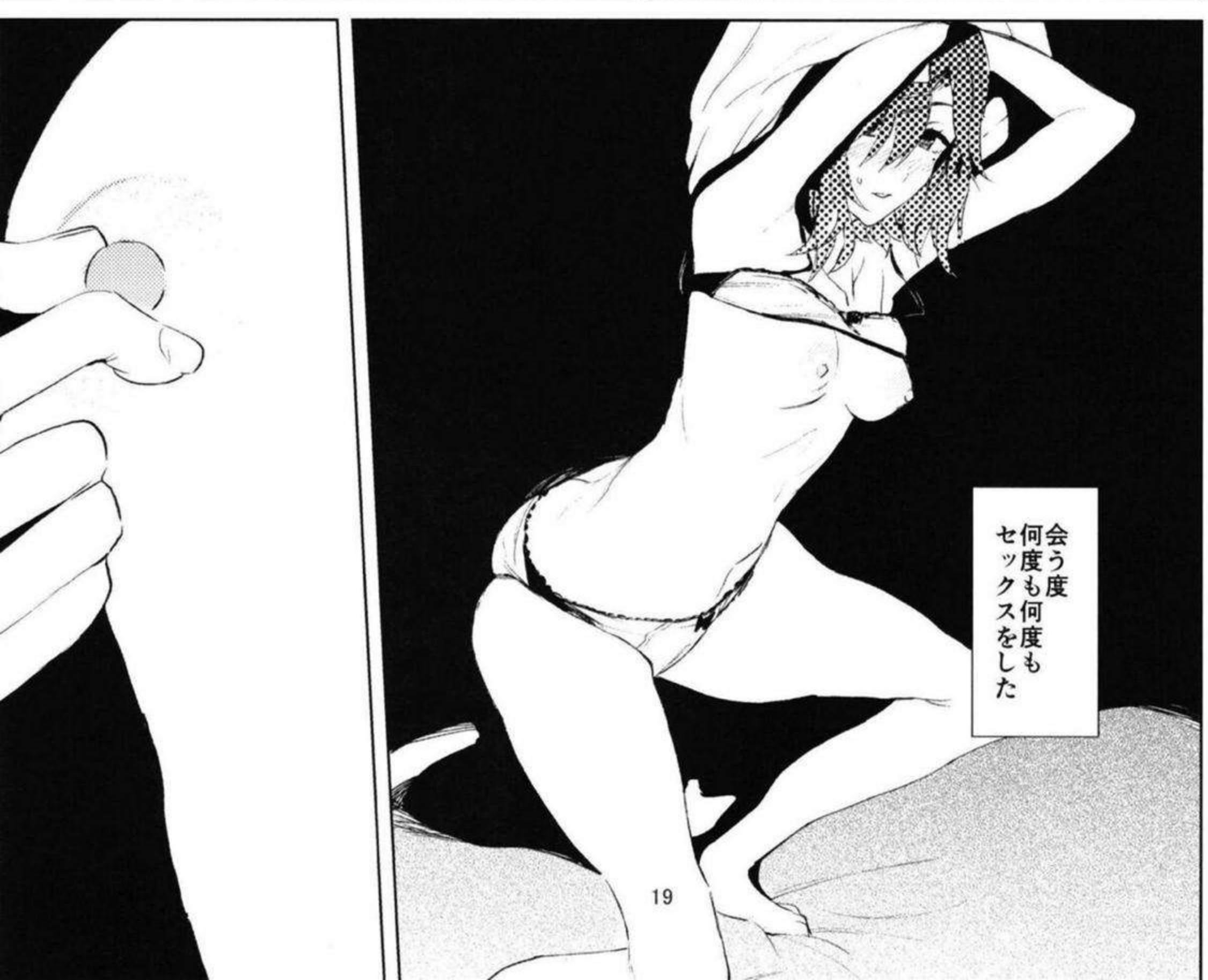
今日
遅いね

うん
疲れた

服
脱がして

ん
なに？

はいはい
樋口さんと僕は
あまり言葉は
交わさなかった


会う度
何度も何度も
セックスをした

くりっ
さわっ
はーっ
はーっ
ぴくっ
はーっ
あっ
ずこっ
ずこっ
ぎしっ
あぁっ
ぎしっ

はっ
はっ
ぴゅ
るるるっ
ぎゅっ
ぶい
っ

どうしたのそれ

今日むかしの知り合いに会って

これいらないからって押し付けられた

弾けるの？

樋口さんはギターを弾いた。
下手クソだった。

樋口さんは歌った。
僕は心の底から綺麗な
歌声だと思った。

僕と樋口さんとを
つなぎ留めていた無力感は、
樋口さんから
失われつつあったことに気付いた。

二人の関係は
終わりつつあることに
気付いてしまった。

僕の世界だけが、
未だに凍結されたままだった。

った…

大丈夫？

指切った…

ねえ

舐めて？

れろ

れろ

くちゅ

ふふ

犬みたい

くすっ

ぱっ
ぱっ
ぎゅ
ぎゅ
ぎゅ

あっ
ずぽっ
あっ
ぱんっ
ずぽっ
あっ
ぱんっ
きゅっ
あっ

樋口さんはほんの少し
生きる動機を
回復したようだった。

僕と樋口さんとの
紐帯は完全に
消えてしまった
ように思った。

分かりきっていた
理由だけ聞いていい？
先輩とっくに分かっているんでしょう？
わざわざ訳を聞くなんてどこまで愚鈍なのあなたは
あなたは段階を踏むべきタイミングで踏み止まれた
だけど段階を踏むべきタイミングで踏み越えられなかった

そうか

結局のところ、僕には
どうすることも
できなかった。

愛とは水面に
投げ込まれた石から
広がる波紋のようなもので、

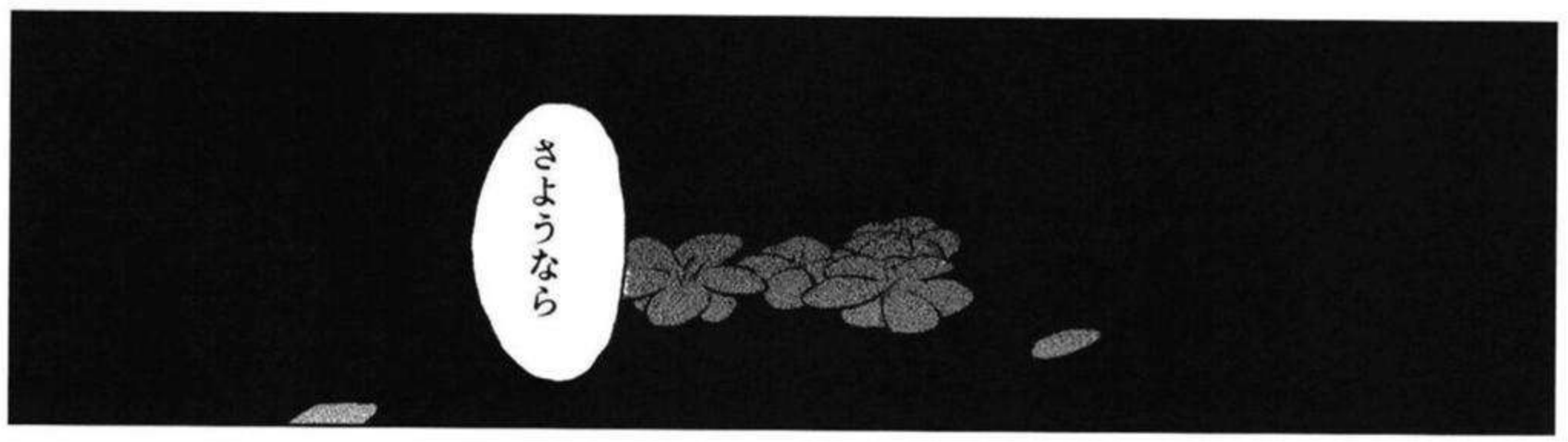
始点が最も美しく波立ち、
その後は急速に減衰していく。

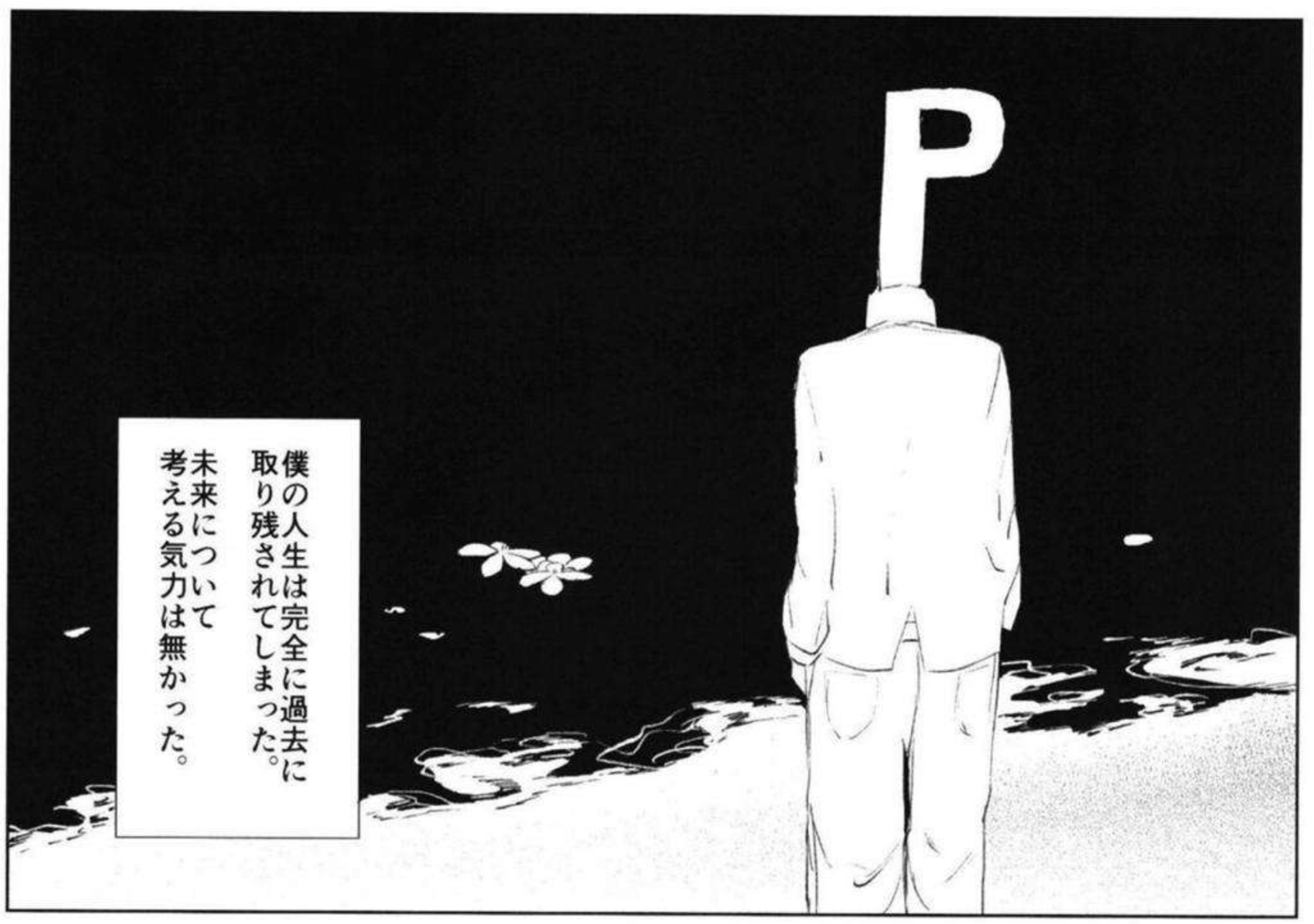
愛は時として一人の人間の
人生を生きてゆくのに
十分なものにするだろう。

しかし、
愛を持続させ続けるのは
ほとんど不可能だ。

こういう時、
人は自身の人生に
なにか行動を起こすほどの
動機が一つも無いことに
気付く。

僕以外の世界はどんどん
合理的に閉じられてゆき、
僕だけが不合理な存在に
思えた。


さようなら


僕の人生は完全に過去に
取り残されてしまった。
未来について
考える気力は無かった。

帰り道、
安い赤ワインと
睡眠薬を買った。

その晩は一人で
映画を観た。
可も不可もない出来だった。
取り立てて言うべきことは
何もなかった。

樋口さん

初版発行：令和三年十二月三十一日

著者：あすぜむ
発行：イマソリドンダイ

連絡先：usthem0102@gmail.com

印刷所　同人誌印刷ドットコム

イマソリバンダイ